

前方後方墳の系譜と東駿河の大型壺

東海大学文学部 北條芳隆

講演の要旨

連続講座にお招き頂きましたことに感謝申し上げます。本日の私は、まず前方後方墳の系譜に関する現時点での研究状況をあたりながら高尾山古墳の位置づけを紹介します。次に高尾山古墳が築かれた時期に東駿河で多量に生産された大型壺（それを「大廓型壺」と呼びます）がどのような役割を果たしたのか。この課題について私の見解を紹介します。

前段では長野県弘法山古墳との比較を基礎に、方位観に関する古相と新相の話題、風水思想からみた古墳の機能を紹介します。また最古の前方後方墳は纏向メクリ1号墳で丸ヶ谷戸古墳も同形であることや、高尾山古墳の築造企画は前方後円墳である五塚原古墳と酷似することなどを紹介します。つまり前方後方墳の系譜は前方後円墳のそれと錯綜しながら相互に連動しており、祖型の起源地こそ近江地域ではあるものの、各地への発信源は大和地域に求められることをお話しします。

後段の内容は次のとおりです。卑弥呼の時代ともいわれる西暦3世紀の東駿河地域の人々は、大和王権からの承認のもと、王権の代理役として、中部地方の甲斐地域や関東地方一帯に経済的な側面での積極的な働きかけをおこなった結果、中部や関東でも古墳時代が幕を開けることになった、との私案です。詳細は添付資料〈大廓エクспанション論〉に概要を示しています。

原資は静岡市の登呂遺跡や小黒遺跡、伊豆の国市の山木遺跡で生産された稲粃です。稲は量産されれば貨幣となりましたから、それを甲斐や関東各地に運び、荷揚げ場に市場を開設すれば、現地の人々を惹きつけ様々な物資が市に集まります。稲を貨幣とする市場交換が活性化したのです。では稲はどうやって甲斐や関東各地に運ばれたのでしょうか。それを担ったのが東駿河産の大廓型壺です。この特徴的な壺の生産地は狩野川河流域の一帯で、集積地と搬出港が高尾山古墳の近隣だったと推定されますので、高尾山古墳の被葬者は、関東各地に開設された市の司たちの胴元であった可能性が高いといえるのです。短時間ですがお付き合い下さい。

構成と概要

1. 高尾山古墳と弘法山古墳

- ① 年代、墳丘の規模や木棺の形状とサイズ、副葬鏡も同形式鏡という酷似した状況
 - * 相互に深い関係をもつ可能性が示唆される
- ③ 重大な相違点
 - * 墳丘築造法は弘法山古墳が「立石・葺石型」で高尾山古墳は「周溝型」
 - * 「周溝型」の最古例は奈良県纏向メクリ1号墳（弥生終末の庄内3式期）
 - * 「立石・葺石型」の最古例は奈良県纏向ホケノ山古墳、京都府五塚原古墳（前方後円墳）
 - * 弘法山古墳の埋葬施設は礫層で系譜は中部瀬戸内の備讃地域
 - * 高尾山古墳の埋葬施設は木棺直葬で系譜は畿内地域
 - * 木棺から副葬品までは大和王権が事前にあつらえ双方に贈与した可能性が高い。丸ヶ谷戸古墳や高尾山古墳の築造法は纏向遺跡と連動する。一方、弘法山古墳には中部瀬戸内の関与が付加された可能性が高く、その意味では後出的。

2. 太陽の運行と北天の周極星

① 風水思想的な解釈

* 双方共に主山から発せられる「気」が被葬者の「魄」を集落域に運ぶ空間上の配置

② 古相の方位観と新相の方位観

* 弘法山古墳の墳丘は冬至の日の出信仰、高尾山古墳の墳丘は北辰信仰への帰依を表明

* 弘法山古墳は弥生時代から引き継ぐ古相の方位観で高尾山古墳は新相の方位観

* 墳丘に直交する高尾山古墳の埋葬頭位は日の出・日の入り

* 纏向大型建物Dの正面観との奇妙な一致

3. 高尾山古墳の主が主導した経済的支配

① 大廓型壺の重要性

* 弥生終末期の東駿河で大量に製作され、甲斐や関東内陸部まで移送された大型壺

* 最大容量は200ℓでこの時期の東海・関東では最大容量を誇る壺

* カワゴ平パミス（白色軽石）を重量比で25%も含むため比重は軽く多孔質の壺

* 口縁部内面突帯は木蓋を被せる工夫であり、海上輸送用に適した特徴をもつ

② 纏向遺跡に持ち込まれた大廓型壺

* 大廓Ⅱ式期の壺は纏向遺跡の辻土坑4下層からS字状口縁甕などと共に出土

* 土坑の下層に稲籾層があり、甕には炭化米が付着していた。最大容量は大廓型壺

* 駿河産の米が大廓型壺に収納されて献上された可能性大

* 辻建物2は東海地域の勢力が大和王権に食物を供献する服属儀礼を実施した証拠

* 東駿河地域の有力者が王権の代理役として甲斐や関東の地域支配に乗り出す起点

③ 稲籾を甲斐や関東各地に持ち込んだ東駿河地域集団

* 駿河地域一帯は氾濫平野を広域水田化したエリアの太平洋側の東端

* 大廓Ⅲ式以降の大型壺は駿河産の稲籾を甲斐や関東に運んだ海上輸送用コンテナ

* 陸揚げ先に交易拠点を設け、稲籾を原資とする市場交換の場を開設

* 市場の開設と連動し、市場を見下ろす高台に前方後墳を造営

④ 前方後円（方）墳の時代の幕開けは稲籾建市場経済圏の拡大

* 「魏志倭人伝」の記載とも整合する前方後円（方）墳の被葬者像

* 初期前方後方墳の被葬者は「大倭」であった

添付資料〈大廓エクспанション論〉の概要

大廓型壺の評価に関する事実関係

① 最大容量200ℓ（最少容量22ℓ）を誇る大型の複合口縁壺 → 超大型の収容量への需要

② 弥生終末期から古墳時代前期前半にかけて東駿河で登場 → 関東甲信越地域に向けた作用

③ 口縁部上端が厳密な意味で平坦面をなし内面突帯を施す → 上面に木蓋を挿入する意図

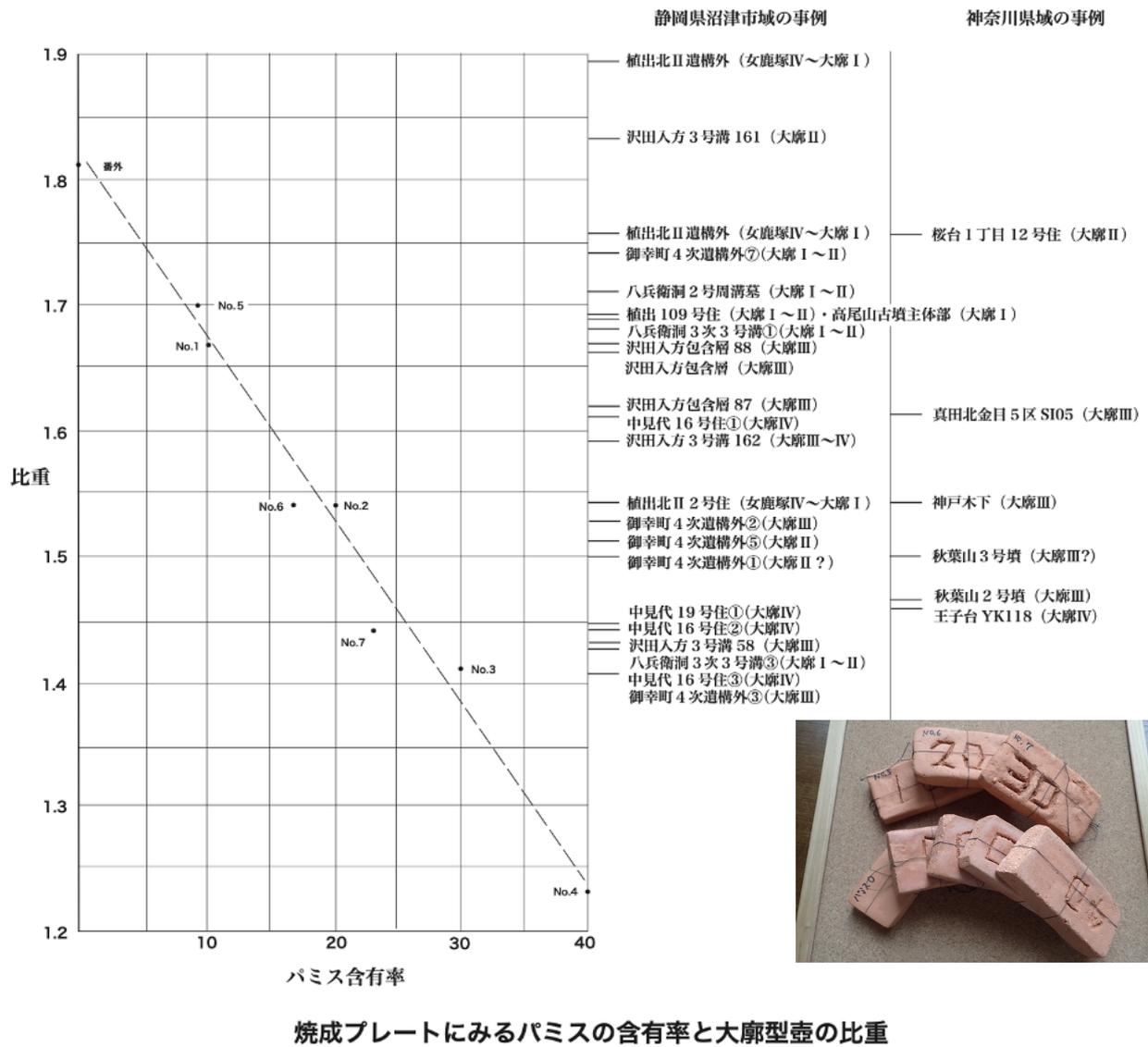
④ 胎土にカワゴ平パミスを多量に混ぜ込む → 比重が低くなり、軽量で通気性と吸水性に富む

→ 土器の制作時間は短縮し、硬く焼成される

→ 耐火性に富むため炉壁への転用例がある

→ 墳丘盛土内に多量の破片が混ぜ込まれる（大廓Ⅲ式）

⑤ 用途としては稲籾など穀物類の貯蔵が考えられる → ③と④との関連



⑥ 分布の偏在性をみると海上輸送、河川航路が推定される →②と③との関連

大廓型壺の評価に関する状況証拠

- ① 弥生後期以降、東駿河では海岸平野の広域水田開発が進む（登呂遺跡・小黒遺跡・山木遺跡など）
- ② 大廓Ⅲ式期（布留Ⅰ式期）以降、関東の内陸部で低地部の水田開発が進む
- ③ 弥生終末期の周溝型前方後方墳は東駿河の富士山麓で出現（丸ヶ谷戸古墳－大廓Ⅰ式期）
- ④ 大廓Ⅲ式期には沼津市域で次世代の周溝型前方後方墳が出現（高尾山古墳－大廓Ⅲ式期）
- ⑤ 大廓Ⅲ式期以降、関東の相模湾沿岸部や荒川水系で前方後方墳が出現する
 - 大廓型壺の広域波及と連動する現象
- ⑥ 墓壙上祭祀など墳墓祭祀にも用いられるが、集落からの出土が多く、壺形埴輪とは異質
 - 墳墓祭祀に限定されない一般的用途が主体

大廓型壺に対する報告者の見解

- ① 大廓型壺は東駿河産の稲粃を遠隔地に搬出する目的で誕生した（大廓Ⅱ式は奈良県纏向遺跡の辻土壙4下層から多量の稲粃殻層と伴って出土。山梨県域にも搬出。Ⅲ式期以降には関東の内陸部へ向けて搬出）



- ② 関東の内陸部への稲粃は海上輸送・水上輸送された（大廓型壺はその容器）
- ③ 稲粃の供与によって関東内陸部の経済を刺激し、東駿河からの出張交易拠点が形成された
- ④ 周溝型前方後方墳は、新設された内陸の津や市の司を葬るモニュメントであった。
- ⑤ 大廓型壺は稲粃建経済圏を関東甲信越に拡大させる機能を担い、その定着と共に消滅した。

前方後方墳の時代の幕開けに関する報告者の解釈（素描）

経済活動の飛躍的活性化 前方後円（方）墳の時代の到来を考えるうえでもっとも重視すべき事柄とはなにか。それは日本列島各地のさまざまな物産を商品化して、要所要所に交易の場となる市を確保し経済活動を飛躍的に活性化させたことにあったと考える。たとえば関東地方における古墳時代前期の標識遺跡、五領遺跡の近隣一帯（埼玉県東松山市域）に着目すれば、荒川流域の支流、都幾川のほとりに荷揚げ場と交易拠点となる空間をつくり、東京湾から荒川を經由して遡上させる船便が停泊可能な場所と市場を構築することになったと推定される。高坂3番町遺跡や反町遺跡が具体例で、このような場所を仮に「内陸の津と市」と呼ぶことにする（北條2017）。

それ以前から現地に設けられていた津や市を活用する場合も当然あったと推定される。しかし関東地方の内陸部では、新たに作りあげるケースの方が多かった可能性が高い。というのも津や市の開設は、未開拓であったエリアの耕地開拓と一体のものであったと把握されるからである（若狭2002）。いいかえれば、この時代に起こった経済活動の活性化とは、新規入植と拠点開発の積み重ねによって引き起こされたと理解すべきである。もっとも典型的なのは栃木県域で、この時代になって遺跡が急増する現象が認められる。

さまざまな経済効果 関東内陸部の人々は、新たに設けられた「内陸の津と市」を通じ、はるか遠くの西日本地域からもたらされる品々を初めて手にすることになったはずである。ひとたびこのような交易拠点がおかれると、それまでは近隣の狭い範囲で完結していた物産品の流れに変化が起こる。その一部が遠隔地との交易品の目録に加わる場合もあった。山梨県産の水晶など新たな“特産物”の発見や開発に結びつくこともあったに違いない。

ようするに「内陸の津と市」の設置は、経済活動への刺激以外のなにものでもない。近隣一帯の村々はそれまで経験したことのない騒々しい空気に包まれることになり、人口増加の呼び水ともなったと同時に、従来のムラの秩序は変容を余儀なくされたと考えられる。

もとより日本列島全域へのアクセスが可能になったことで、遠来から到来する若者との色恋沙汰も頻繁に起こったと推定される。市は古今東西を問わず男女の出会いの場だったからである。このような当事者同士の結びつきは遠隔地の集団を同族化させる結果（親族関係の拡大）を招く

ことも重要である。現在の感覚でいうところの経済効果がさまざまなレベルで巻き起こり、それまでの弥生ムラ感覚では想像できなかった交流の渦と社会の流動化を実感させられた時代、それが古墳時代の幕開けだったと推測される（北條2017）。

津と市を象徴する前方後円（方）墳 「内陸の津と市」や、新規入植地での開拓を管理統括する役割の人物が葬られることになったのが前方後円（方）墳であり、それは交易と交流によってもたらされた富を原資とし、津と市の性格を象徴し明示するモニュメントの必要性を背景とするものだったと推定される。その理由は各地の前方後円（方）墳の立地と物流の推定経路との間に明確な相関関係が認められるからである。だとすれば古墳づくりの財源は市から生まれる富だったと考えるのが妥当であるし、その目的も市に関わる宗教性に絞られてくる。

定説が説く「大和政権による支配権の拡大」とは、じつは経済レベルでの影響力の拡大にほかならず、経済を軸に人々の心を王権側に引きつけておくためのさまざまな仕掛けの内実を見極めることこそが、この時代を研究する上では重要な視点である。いわゆる政治モデルではなく、経済モデルこそが有効だと考える。

駿河の地域集団が主導した拠点づくり 関東・東北地方において上記の問題を考えるとき、主導的な役割を果たした存在として注目されるのは、東海地方東部、駿河湾沿岸部の地域集団である。彼らは弥生時代の後期（西暦1世紀）に関東地方南部に進出した実績をもち、相模湾沿岸地域に植民地を切り開き拠点を確保していた（西川1998、立花2005）。その実績を基礎に弥生時代終末期から古墳時代初頭（西暦3世紀後半）には、関東地方の内陸部や東北の太平洋沿岸部の要所要所に津と市を築き、地元住民を巻き込みながら、新たな経済圏をつくりあげたと推定される。ようするに彼ら駿河地域の諸集団が、関東・東北と大和王権側とをつなぐ“代理人”の役目を担ったと理解できる。そのような“代理人”の仲介なくして王権は成り立たない、ともいえる。奈良県纏向遺跡の辻土壙4下層出土の大廓型壺（大廓Ⅱ式）は、駿河地域から初期倭王権に向けて穀物上納が行われた（それによって支配下に入ることを宣言した）ことの明確な証拠だといえよう（北條2019）。

気候の寒冷化への対処 なお遠隔地への入植を伴う経済圏の拡大が引き起こされた背景には、東アジア世界全体を覆う気候の寒冷化があったと推定される。寒冷化に伴う人口支持力の低下はさまざまな側面における社会問題を発生させたと考えられ、当然そうした事態への対処と自己変革が求められたに違いない。近畿地方でも環濠集落を交易拠点とする従来型の経済体制は崩壊し、集落は分散化すると同時に広域的な水田開発が進められるようになった。東遠江や駿河の地域集団が相模湾沿岸部に向けて大規模な入植をおこなった理由も同じである。その意味で「内陸の津と市」を各地に広げ集団の再編成と耕地開発を進めるというさきに述べた諸現象は、当時の倭人社会全体が模索した対処策の一環だったと理解される。

以上の概括的理解を前提として、交易を原資に登場したと考えられる関東地方の前方後方墳とその社会の構造を考える。注目される現象は大廓型壺（柳沼2013）と呼ばれる超大型の土器の急速な広がりであり、この広がりとは前方後方墳の広がりとは深く関わる事実である。背後には内陸の津とモニュメントとの結びつきが想定されることになる。上記の現象を古代メソポタミアの〈ウルク・エクспанション〉になぞらえて〈大廓エクспанション〉と命名し、報告者は前方後円墳の時代の幕開けに関する新たな経済モデルを提示する。

【引用・参考文献】

安里進1998『グスク・共同体・村—沖繩歴史考古学序説—』溶樹書林

小泉龍人2002「ウルク・ワールドシステムとは何か」『西アジア考古学』第3号

立花実2005「神奈川県西部地域における古墳の成立過程」『東海史学』第39号

西川修一編1998『御屋敷添遺跡』財団法人かながわ考古学財団

北條芳隆2013「高尾山古墳と墳丘築造企画論」『西相模考古』第22号

北條芳隆2014「稲束と水稲農耕民」『日本史の方法』第11号

北條芳隆2017「関東地方への前方後円(方)墳の波及を考えるー東松山市高坂8号墳を素材としてー」『三角縁神獣鏡と3～4世紀の東松山』東松山市

北條芳隆2021「大廓型壺の胎土を考える」『西相模考古』29号

北條芳隆2022「纏向古墳群と周辺景観」『纏向学の最前線(纏向学研究10号)』纏向学研究センター

柳沼賢治2013「大郭式土器の広がりー駿河以東についてー」『駿河における前期古墳の再検討ー高尾山古墳の評価と位置づけを目指してー』(静岡県考古学会2013年度シンポジウム)

馬銅野行雄ほか1991『丸ヶ谷戸遺跡』(富士宮市文化財調査報告書第14集)

向日市教育委員会2014「五塚原古墳現地説明会資料」(同教委HPに掲載)

若狭徹2002「古墳時代の地域経営(上毛野クルマ地域の3～5世紀)」『考古学研究』第49巻2号

渡井英蓉2013「大郭式土器から見た古墳時代前期」『駿河における前期古墳の再検討ー高尾山古墳の評価と位置づけを目指してー』(静岡県考古学会2013年度シンポジウム)

Algaze,G.1989 The Uruk Expansion: Cross-cultural Exchange in Early Mesopotamian Civilization. Current Anthoroporogy30 : 571-608.

松本市弘法山古墳と酷似する様相

どちらも邪馬台国の時代に築かれた初期の前方後方墳で、墳丘規模や副葬品もよく似ている

高校校庭を建設する目的で1974年に松本市教育委員会が実施した初期前方後方墳。造営された年代が古すぎ孤立的な資料だったこともあって長らく評価不能な状態が続いた。高尾山古墳の発見によって再注目された。

高尾山古墳：全長 62.2m、後方部長 31.3m)
弘法山古墳：全長 63 m、後方部長 33m)

両古墳ともに上方作系浮彫式獣帯鏡(後漢鏡-漢鏡7期-2世紀後半に製作された青銅鏡)を副葬、木棺のサイズも酷似

松本市教育委員会関沢聡氏撮影
2022.12.25 朝

3世紀に弘法山古墳の前方部に立てば、軸線の延長上から「冬至のダイヤモンド鉢伏山」が観察できたと推定される

北辰信仰「坐北朝南」の方位理念

天の北極を中心軸に据えた世界観(新の王莽が公定した)

StéfaNavigator / AstroArts

2基の前方後方墳にみる軸線と方位観念

高尾山古墳

墳丘はみなし北辰信仰
TN5.4°W

埋葬は太陽信仰
TE+8°

弘法山古墳

墳丘は冬至の日の出信仰
TE+44°

TE-44°

北辰信仰の判定領域に重ならない

弘法山古墳の埋葬頭位にみる特殊性が何を意味するのかは謎。初期前方後方墳の場合、墳丘軸線との直交原則が徹底された結果なのだろうか

大廓型壺の広がり

本拠地

東海地方東部
静岡・富士宮・沼津市域

濃密な分布地帯

- 相模川沿岸地帯
- 東京湾の東側沿岸部
- 荒川流域
- 利根川上流域

東松山市域：重要な荷揚げ場

弘法山古墳

大廓型壺の本拠地

高尾山古墳

柳沼2013文献より転載

軽石を胎土に混ぜ込むことの効用

陶芸界で周知されている事象

素地に軽石を混ぜると早く乾燥し焼成時の失敗も少ない

素地に軽石を混ぜると硬く焼き上がる

大型で厚手の作品を制作するさいには軽石を混ぜる

軽石の混合率は重量比で10%から30%が目安

大廓型壺専用胎土の特徴そのもの

奈良県纏向遺跡辻土坑4下層にみる大廓型壺と稲穂穀との共存関係

稲穂層

辻土坑4下層一括資料
広口壺片は16点、うち最大容量の壺は大廓型壺片2点

弥生時代後期の大規模低地部水田開発地帯

Google Earthより

山木遺跡

登呂遺跡

小黒遺跡

駿河湾

相模湾

大廓エクspansionの構図

大廓型壺の広がり【稲穂の輸送】 → 「内陸の津と市」の設置

↓

市の司

↓

市を象徴するモニュメント【前方後方墳】

東海東部から来た交易の民